

周囲から羨ましがられるほど仲の良い、O夫婦がいました。夫の行くところへ必ず妻が影のように寄り添って、その世話を焼いているのです。本当に心配り・気配りのできた妻だったのです。

A氏は、そのように仲の良い夫婦が、ある日を境に別居し、その後、夫の事業が不調になる中で別れたと聞いた時、一瞬我が耳を疑いました。この夫婦の上に何が起こったのか、別れる理由は何だったのか、A氏には思いあたるものではありませんでした。

しばらくしてA氏は、夫婦の意外な話を耳にしました。

離婚したO氏ですが、若い頃より女癖が悪く、長い間、奥さんは苦しんでいたようです。誰のアドバイスかはわかりませんが、ご主人を監視する意味で、奥さんはご主人と共にするようになったそうです。

端から見ると、絵に描いたようなオシドリ夫婦に見えましたが、最近はおさまっていたO氏の癖も、そのうち妻の監視をくぐって遊ぶようになりました。新たに起こした事業が不振となり、これが引き金となって、別居、離婚というコースをたどったようです。

今は家族もバラバラとなり、別れた妻はその土地を離れて一人で生活をしているとのこと。A氏は倫理の学び、事業と家族はひとつながり」と聞いた時は半信半疑でしたが、O氏の事例からいろいろ考えさせられました。A氏は今まで、自分は良い亭主だと自負していました。家族には人並み以上の生活をさせているし、家の中には仕事上の揉め事を持ち込まずにやってきました。ただし、妻の気

互いの言葉をよく聞き 仮面夫婦を捨て去る



絵・わたなべじゅんじ

常に相手の立場に立って謙虚に耳を傾け、まず自からが変わることです。もう一度足もとの家庭を見直してみることです。妻と正面から向き合ってみることです。そして社員一人ひとりに「私たちが夫婦を見なさい、我が家を見なさい」と言い切ることができる夫婦になることです。まずは、足もとの一歩からです。

持ちになってじっくり考えたことがなかっただけに、身につまされるものがあつたのです。A氏は結婚して以来、妻に苦勞のかけ通しで、子供のことで相談を持ちかけられても、俺は仕事が忙しいんだ。そのくらいはお前が考えてやってくれ」とまともに妻と向き合ったこともなく、これといって家庭に問題がないことをいいことに、好き勝手にやってきました。

O氏夫婦の離婚は、氏と関わりのあつた人たちに、少なからず自分と家庭との関わりについて考えさせられる事柄でした。私たちはともすれば、表だって問題がなければ、「これでよい」と高をくくってしまいがちです。たしかに表面的にはおさまっているように見えても、水面下では様々な思惑が進行しているのかもしれない。

▽

事業も家庭も生き物です。それに携わっている人たちの心の持ち方、生き方によって、どのようなにも変わるものなのです。できていくつもり、やっているつもりで毎日を過ごし、我が社や我が家に限ってそのようなことはないと自負していても、意外ともろい部分があるものです。